

4学期制導入を評価

長崎短大 長期学外学修前に

佐世保市椎木町の長崎短大(安部恵美子学長)で7月29日、本年度導入した4学期制についての評価委員会があり、「長期学外学修プログラム(ギャップイヤー)」を前にした学生の意見などが報告された。

同大は、国際コミュニケーション学科の在学2年間のカリキュラムを▽準備▽導入▽実践▽検証▽定着▽応用▽発展▽完成の8タイム(期間)に分類。学生は

3タイム(1年次の8～11月、実践期間)に、企業でのインターンシップ(就業体験)や留学などに取り組む。

評価委は学内外の教員らで構成。この日は8人が出席した。市と連携して展開する地域密着型学習「Awesome Sasebo! Project」にちなみ「長崎研究」という課目の新設を報告。準備導入期間で、実践期間に向けセミナーなどを学ぶ講義が増えるため、第2外国語の授業が減ったことが説明された。

8月スタートの実践期間の学生の取り組みは、県内外のインターンシップ(就業体験)37人、留学18人、地域での長期ボランティア3人。これを前に、学生からは「経験を将来に生かせそう」など肯定的な意見が多い一方、「4カ月も語学がないのが不安」という声もあることが分かった。

委員からは「短大で4カ月もの長期学習ができるのは良い」「実践期間中、学生を放置するのではなく、教諭の深い関わりが必要」

「検証期間には、実践期間の体験を徹底的に言語化して発表するようにしたい」などの意見が出た。

(永江倫子)